

平成 21 年 6 月 7 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2006～2008

課題番号：18700503

研究課題名 (和文) ジュニアスポーツにおける親と子の相互関係パターンの検討

研究課題名 (英文) Examination of parents and child's interrelation patterns in junior sports

研究代表者

武田 大輔 (TAKEDA DAISUKE)

独立行政法人日本スポーツ振興センター国立スポーツ科学センター・スポーツ科学研究部・
研究員

研究者番号：10375470

研究成果の概要：高い競技レベルで活動するジュニア選手とその親を対象とし、親の関わり方と子どもの心理的発達について、心理臨床的アプローチを用いて検討した。予備検討として実施した親子関係のパターンを明確にする尺度については、基礎的データを分析したところ、尺度の修正が必要となり、今後の課題とした。同時進行していた事例的アプローチでは、積極的干渉の強い親は、子どもの活動を応援する中で、子どもの父親像あるいは母親像の形成に大きな影響を与えていることが明らかとなった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,600,000	0	1,600,000
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	240,000	3,640,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：ジュニアスポーツ、親子関係、心理的発達、臨床スポーツ心理学

1. 研究開始当初の背景

近年、子どものスポーツ経験が、彼らの心身の発達にどのような影響を与えるのかといったテーマへの関心が高まっており、平成16年の体育学会では、体育心理学や発育発達学の分野でのシンポジウムに取り上げられている。その対象は、体育授業から競技スポーツまで幅広いが、いずれにせよ、子どもの心身の健全な成長に運動やスポーツが寄与する可能性を探るものであり、体育・スポーツ科学分野にとって重要なテーマである。

本研究は、競技的要素を含むスポーツ活動を対象とする。子どものスポーツの現状には、低年齢層からの活動開始、単一種目への早期からの専心といった特徴があり、またその競技レベルは年々高まっている。子どもは活動を通し、競技に必要な技術・戦術だけでなく、自身の生き方を形成していく。一方、子どもの親の多くは、スポーツによる子どもの健全な成長を願いつつ、物心両面からの支援を介して積極的に子どもに関わる。スポーツによる子どもの健全な成長を期待するならば、身

近な存在である親の果たす役割が重要であることは言うまでもない。したがって、スポーツを通じた親と子の相互関係を詳細に捉え、その関係が子どもの成長や活動にどのように寄与するかを明らかにする必要がある。

ところで、欧米を中心とする子どものスポーツ活動における親子の関係を扱った従来の研究では、質問紙などを用いた調査研究が多く、研究結果として、平均的な親の関わりの様相や、親の関わりと子どもの心理的発達との関係が明らかにされてきた。しかし、本研究者は、それらの研究では、親の関わりの扱い方があまりに表層的であると指摘し、子どもに対する親の関わりを、親から子どもへ伝えられる“メッセージ”という新たな視点を導入した。つまり、日常的に展開している親のそれぞれの関わりが、子どもへどのような意味内容として伝わっているのかに注目した。そして、親の関わりは、複数のメッセージから構成され、それらが子どものスポーツ活動での認知・情動的態度に密接に関係していることを明らかにしてきた(武田・中込, 2002; 武田・中込, 2003)。

こうした一連の研究により、親の関わりの具体的内容が明らかとなったが、一方で、親の行為が子どもの心理的発達(人格形成)にどのように作用してきたのか、といった詳細なメカニズムを捉えるには至っていない。

そこで本研究では、競技スポーツを行ってきた選手とその親との相互関係のパターンを検討することを目的とした。

本研究は、親がどのような心構えを持ち子どもを支えることが重要となるか、という現場に関わる者が日常抱く問いに答えることになる。これは、子どものより良いスポーツ環境の構築につながることは当然のこと、体育・スポーツ科学そして文化の発展に貢献する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、競技レベルの高い環境で育った選手の成長過程における親と子の相互関係のパターンを明らかにすることである。そして子どもの心理的発達における各パターンの影響差を検討する。

本研究目的を達成するため次のような課題を設定する。

検討課題1: 子どものスポーツにおける親と子の相互関係パターンを“メッセージ”という視点から同定し、尺度(スポーツ活動における親子関係診断尺度)作成を試みる。

検討課題2: 青年・成人競技者の回顧的資料及び青年・成人競技者の心理臨床事例から、

親と子の相互関係パターンが、選手の競技を通じた心理的発達(人格の発達)にどのように作用してきたかを力動的に捉え検討する。

3. 研究の方法

(1) 検討課題1

準備期: 親子の相互関係パターンを同定する尺度の構成に向けて、本研究者がこれまでに作成した親の関わり尺度を加筆・修正する。ここでは、親から子どもへ伝えられるメッセージ(意味内容)を反映し、“支配型”“養護型”“放任型”“服従型”などを仮定した尺度構成を試みる。

調査

対象者: 小学校高学年から中学生年代の男子サッカー選手500名程度。

方法: 質問紙法

調査内容: 作成された親子相互関係パターン尺度

調査予定地域: 全国各地にあるJリーグの各チームのホームタウン。

分析とまとめ: 統計的処理を行う。

(2) 検討課題2

対象者: 青年・成人アスリート若干名。

方法: 心理臨床的接近法、及びインタビュー調査。調査事例では、対象者に競技ヒストリーを語ってもらう中で、特に親の関わりについて振り返ってもらう。

心理臨床においては、相談にやって来る選手の語る内容を的確に捉えるため、定期的に行われる事例検討会への発表や、経験豊富な臨床心理士やスポーツカウンセラーのスーパーバイズを積極的に受ける。

4. 研究成果

(1) 親子関係パターンの尺度の再構築

本研究者がこれまでに作成した尺度は、全部で32項目、7つの下位尺度(自信強化、間接承認、援助、統制、結果指向、価値、情動評価)から構成されているため、パターン化するには煩雑であった。そこで、次の分析手順を経て、全20項目、4つの下位尺度から構成される尺度への修正を試みた。データには、964名の父母の回答を使用した。最初に、4因子を設定し、因子分析を行った。その後、因子負荷量の高い項目5つを抽出し、合計20項目を用いて再度4因子を設定し、因子分析を行った。下位尺度名として、「統制」(F1)、「サポート」(F2)、「間接承認」(F3)、「情動評価」(F4)とした。

次に、親の関わりに対するジュニア選手の

認知パターンを探るために、改訂尺度の下位尺度項目に対する回答を用いて、クラスター分析を行った。データには、481名のジュニア選手（小学5年-中学2年）の回答を用いた。クラスターを4に設定して、4つのクラスターを抽出した。各クラスターに分類された選手の特徴を把握するため、親の行動尺度得点をグラフ化した（図1）。クラスターの特徴は次のとおりである。

- C-1：すべての下位尺度得点が高く、積極的な親の関わりを受けている選手。積極的型。167名と人数が一番多い。全体的に高得点であるため、やや過剰な親への意識を持っていると考えられる。
- C-2：C-1と対照的に、すべての得点が低く、親の関わりをさほど意識していない選手像である。消極的型と言え、人数は47名で一番少ない。
- C-3：統制、サポート、情動評価は、ほぼ同じような得点であるが、間接承認得点が高い。これは、行動に現れる親の関わりを認識すると共に、行動に現れなくとも、恒常的に親のポジティブな支え（安全感）を受けている選手。安全型と言え。
- C-4：C-3と同様に、統制、サポート、情動評価の得点は、ほぼ同等であるが、間接承認の得点がやや低い。直接的な親の関わりに対して感受性の高い選手と考えられる。高感受性型と言え。

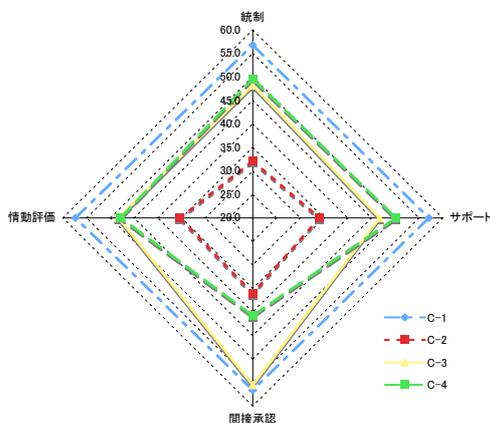


図1 各クラスターの親の関わり得点のグラフ

次に、各クラスターに分類された選手の認知する日常生活での養育態度の特徴を捉えるため、下位尺度（拒否、支配、保護、服従）得点をグラフ化した（図2）。各クラスターの養育態度の特徴は次のとおりである。

- C-1：拒否のみやや低く、服従、支配、保護いずれも他のクラスターよりも高い得点。スポーツでの親の関わりに対しても意識が高い。スポーツ・日常生活と区別なく、

選手への積極的な関わりが想像される。

- C-2：服従、保護が低く、支配、拒否得点が高い。スポーツに対する親の関わり得点は全体的に低い。ポジティブに捉えれば、自我の発達に伴い、親への意識が少なくなってきていると考えられるが、一方で、自分を見てくれない（拒否）、親にコントロールされている（支配）などの背景も若干懸念される。
- C-3：いずれも50点に近く、バランスがよく標準的な養育態度と考えられる（本対象者の範囲では）。健康的な親の養育態度であると仮定すると、スポーツに対する親の関わりにおいても、安全感を抱いている選手像を描くことができる。
- C-4：C-3とほぼ同じであるが、若干、拒否得点が高い。先に、親の関わりに対して高感受性であると指摘したが、親に対する意識が高いからこそ、拒否的な態度にも敏感とも考えられる。

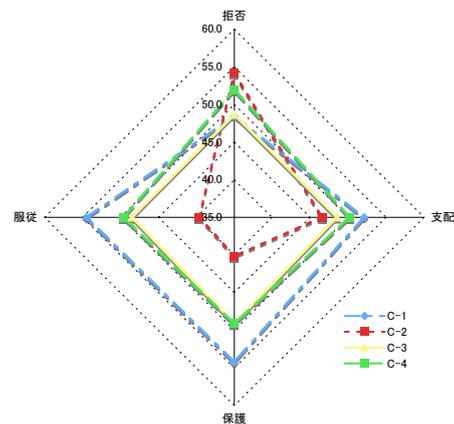


図2 各クラスターの養育態度得点のグラフ

以上のように、尺度の再構成を試みたが、本来の目的であるパターン分けには、さらに詳細な分析が必要と考えられた。

(2) 事例の検討

親の関わりが、子どもの心理的発達にどのように影響を与えているのかを検討するために、心理臨床による実践及びインタビュー調査を行った。ここでは、調査事例として扱ったひとつのケースを報告する。

事例A 20歳 男性 競技B

事例中の「斜字」は対象者、『斜字』は対象者の語る他者の言葉、()は付帯情報を示す。

小学生のころから高い素質に恵まれたAは、徐々にBに真剣に取り組むようになる。同時に、両親が頻りに試合を見に来るようになる。

実力が功を奏し、中学時代は名門チームでプレーすることになる。自宅からチームまでは車で長時間移動のため、毎日父親が送り迎えをした。レギュラーに入れず苦しい時期もあったが、その時の親の関わりについては、「特に何もしてくれなかった。『早く怪我直しな』と言うくらい」と語るように、積極的過ぎずかつ見放すこともない程よい関わりであった。しかし、中学生の後半くらいからは、「親もBを知り始めたのか知らないけど、いろんなことを言ってきた。『お前は気持ち弱くからもっと強くいけ』など」。しかし、反抗期でもあったことから、Aは父親の言われることを受け入れることはできなかった。しかし、親から言われることはすべて自分の弱いところを指摘している的確なものであったとも述べている。

高校時代は、中学時代ほどの積極的な親の関わりはなかったようである。これには、「『中学校までは世話するけど、高校からは自分で考えろ。後はお前次第だ』って言われていた」と、親の持つ教育的価値観が反映されているようである。親と接する時間が減ったことについて、「ちょっとホッとした部分もあって、でも逆に複雑みたいな」と、親の変化に少し戸惑いもあったようである。高校時代でも、Bについての会話が中心であった。その内容は、「中学時代と同じでメンタルですね。『もっと激しく。点を決めるポジションだからもっとわがままに』と。親だから僕の性格知っているのかわかんないけど、僕はどっちかというわがままではない。プレーでは確実な方を選ぶ。決められた感じでやっちゃう。でも、親には『前向いて勝負しろ。もっとわがままにしろ』って言われて。確かにその通りだなと。でもやっぱ基本は変わらないかもしれないです。ベースはそんな変わらないですね。確実なプレーをしてしまおう。」と、これまでと同じようにBのことについて父親から言われ続けるが、彼の成長とともに、親からの言葉を受け止め、自分の中に取り込もうとする姿勢が窺える。Aは、高校時代もレギュラー争いをする中で、陽の目を浴びない時間を過ごすこともあったが、この時期には、Aに備わった自信が、彼を支えているようであった。これについて、親から一貫して言われ続けてきたことがある。「小さい頃から、『お前はやれる』ってことはよく言われていました。『トップのレベルでやれる。ここで終るような奴じゃない。』とは

よく言われました。自信にはなったと思います。」このように、幼少期から一貫してAのことをポジティブに支える親の姿勢を、A自身が受け止めてきており、それが彼の競技に対するモチベーションの維持、さらに父親との繋がりを構築しているように感じられる。

父親からのプレーに対する要求は、父親の生き方そのものをメッセージとして含み、Aに送られ続けているようであった。しかし、Aのプレー自体は父親の生き方とは反する安全で確実なものであった。父親の影を子どもが引き受けているとも捉えることができる。

本研究では、高い競技レベルの中で、子どもたちが親からどのような影響を受けているのかを、親子の関わり方のパターンから検討することを目的としてきた。事例から示されるように、ひとつの関わり方の形があるのではなく、その関わり方の中に、干渉的な部分、寛容な部分などが混在している。いずれにせよ、親の生き方そのものが、子どものスポーツへの関わりに反映され、子どもたちはそれに応えようとプレーしているとも読み取れる。今後は、事例を重ねる中で、ジュニア選手が各自の父親像あるいは母親像、言いかえれば、男性性、女性性機能をどのように育んでいくのかを検討することが必要であろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

武田大輔. 子どものスポーツにおける感情表現に含まれるメッセージ. 体育の科学, 59巻, 87-91. 2008. 査読なし.

武田大輔. 指導と心理臨床の現場から子どものスポーツの可能性を問う. 児童心理, 62巻, 91-95. 2008. 査読なし.

〔学会発表〕(計1件)

武田大輔. ベースの不確かさが背景にある大学競技者の事例. 第17回臨床スポーツ心理研究会 2007年9月. 神戸大学.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

武田 大輔 (TAKEDA DAISUKE)

独立行政法人日本スポーツ振興センター
国立スポーツ科学センター・スポーツ科学研究部・研究員

研究者番号：10375470